

実施年度 : 2024 (2025 入試) 年度

試験日 : 2025 年 2 月 24 日

入試種別 : 大学院 (博士後期課程) 入学試験問題

学部・研究科 : 文学研究科 真宗学専攻

科目名 : 第 2 群 ②仏教漢文 (真宗学)

**【解答又は解答例】**

1

(1) 書き下し :

われ『無量寿経』を聞くに、「衆生、この仏名を聞いて信心歡喜せんこと乃至一念せんもの、かの国に生ぜんと願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住すと。不退転は梵語にはこれを阿惟越致といふ。『法華経』にはいはく、「弥勒菩薩の所得の報地なり」と。一念往生、便ち弥勒に同じ。仏語虚しからず、この『経』はまことに往生の徑術、脱苦の神方なり。みな信受すべし

現代語訳（解答例）：

『無量寿経』をうかがうと「衆生がこの仏（阿弥陀仏）の名を聞いて信じ喜ぶその一念のとき、その仏国土に生れようと願うならば、すなわち往生が定まり、不退転の位に入る」と説かれている。不退転とは、インドの言葉では阿惟越致といわれる。『法華経』には「弥勒菩薩が得られた位である」と説かれている。この一念に往生が定まれば、その位はすなわち弥勒菩薩と同じである。仏語にはいつわりはない。この経（『無量寿経』）の教えはまことに往生への確実な道であり、苦から解脱するための不可思議な方法である。みな信じ受け入れるべきである。

（2）書き下し：

また如是といふは、すなはちこれは法を指す、定散両門なり。是はすなはち定むる辞なり。機、行ずればかならず益す。これは如来の所説の言、錯謬なきことを明かす。ゆゑに如是と名づく。また如といふは衆生の意のごとしとなり。心の所樂に随ひて、仏すなはちこれを度したまふ。機教相應せるをまた称して是とす。ゆゑに如是といふ。

現代語訳（解答例）：

また「如是」というのは、仏の説かれた法を指し、ここでは定善・散善の二つの法門のことである。「是」とは定まっていることを示す言葉である。教えを受ける者が、この行を修めれば必ず利益を得る。これは、如来の説かれた言葉には誤りがないことを明かすものである。だから「如是」というのだ。また「如」とは衆生の意のままにということを示している。衆生の心の求めにしたがい、仏はたちまちお救いになる。教えを受ける者と教えとが相かなうことを、また「是」という。だから「如是」というのだ。

(3) 書き下し：

もし『涅槃経』によれば仏性を宗となす。もし『維摩経』によれば不可思議解脱を宗となす。もし『般若経』によれば空慧を宗となす。もし『大集経』によれば陀羅尼を宗となす。いまこの『観経』は観仏三昧をもつて宗となす。もし所観を論ずれば依正二報に過ぎず。

現代語訳（解答例）：

もし『涅槃経』によれば、仏性を説くことをその宗旨とする。もし『維摩経』によれば、不可思議解脱を説くことをその宗旨とする。もし『般若経』によれば、空慧を説くことをその宗旨とする。もし『大集経』によれば、陀羅尼を説くこと

をその宗旨とする。今この『観経』は観仏三昧を説くことをその宗旨とする。もしその観ずるところを論じるならば、それは浄土の仏国土の莊嚴（依報）と阿弥陀仏と菩薩衆などの聖衆の莊嚴（正報）との二つにほかならない。

2

(1) 書き下し：

「本願力」といふは、大菩薩、法身のなかにおいて、つねに三昧にましまして、種々の身、種々の神通、種々の説法を現ずることを示す。みな本願力を持って起せり。たとへば阿修羅の琴の鼓するものなしといへども、音曲自然なるがごとし。これを教化地の第五の功德相と名づく。

(2) 当該問題は、受験生の今後の研究に必要となる仏教漢文の読解力と専門分野に関する知識を問うものである。解答が一義的でなく解答例の提示はなじまないことから、採点のポイントを示す。

採点は以下の点を踏まえて総合的に評価する。

- 設問の指示に従い回答していること。

- 回答において、本文の出典である曇鸞の『往生論註』の当面では「大菩薩」は「浄土に往生した菩薩のこと」であるが、『教行信証』行巻の引用では、親鸞はこの「大菩薩」を「法蔵菩薩」とみなしていると解釈されていることが論じられていること。
- なお**不適切な語彙の使用や、誤字、脱字は減点を行う。**